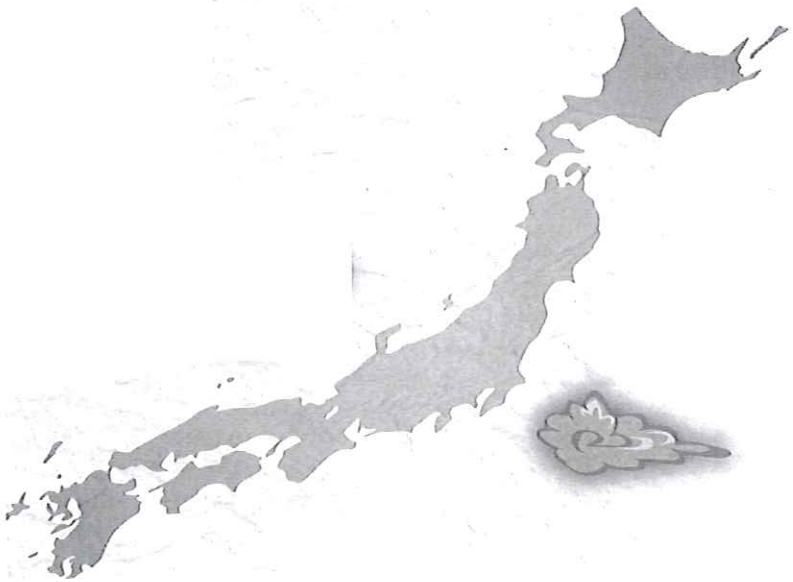
西ばりまライオンズクラブ
日論語に学ぶ人間学セミナー
（令和三年十二月一日）
第十回「大祓詞」に学ぶ　三木英一

遠い遠い昔の、神さまと人間のお話です。

高い空の上、高天原という天上の世界に、神さまたちが住んでいました。地上にも、別の神さまたちが、人間と一緒に住んでいました。

ある日、天上に住んでいる、カムロギという男の神さまと、カムロミという女の神さまが、地上の様子を見て、おおぜいの神さまたちに集まってもらい、こう言いました。

「あの地上にある日本という
国を、平和に暮らせる
立派な国に
つくりあげてくれ」



そう言われたものの、地上に住む神さまたちの中には、不満ばかりを口にして反対する神さまや、不平ばかり言って乱暴する神さまもいて、天上の神さまたちは

「困った困った。どうすれば立派でいい国をつくることができるだろうか」

と悩みながら、みんなで何度も話し合いました。

やがて、その願いが通じたのか、反対していた神さまも、ようやく「ごめんなさい、ぼくたちが間違っていました。一緒にいい国をつくりましょう」と言って、協力してくれるようになりました。

するとどうでしょう、反対していた神さまばかりでなく、石や木や、葉っぱまでもが、「そうだ、そうだ」と賛成するではありませんか。さわがしかった日本の国はすっかり静かになり、安心して暮らせる平和な国になったのです。

そこで、カムロギ・カムロミの子孫であるスメミマという神さまは、高天原の天上の世界を出発され、穏やかになった日本の国に向けて、雲をかき分け、押し分けて　地上に降りてきました。

スメミマは、お願いされたことを実現するために、まず大きな家を建て、そして、日本の国をもっと立派な国にしようと、さらに努力します。

しかし、地上に住む人間というものは、ついつい、ウソをついたり、間違ったことや悪いことをしたりして、罪をつくり、悪い心のケガレをたくさん溜めてしまいます。

そこでスメミマは、人間たちがつくったいろいろな罪やケガレを消し去り、清らかにする方法があることを教えました。

「まず、細い木をきれいに切り揃えて、たくさん台の上におき

なさい。麻の木の皮も細かく裂いて、お祓いの道具にしなさい。そして天上の神さまが教えてくれた〈のりと〉という言葉をとなえなさい。そうすれば神さまたちは、人間の願いをしっかり聞いてくださり、その願いは叶えられるでしょう」

こうすることで、人間の罪や

ケガレや悪いことは、すべて消えて いくのです。

それは、まるで雲や霧が風で吹き飛ばされて消えていくようでもあり、船が海を自由に泳ぐ姿のようでもあり、森の木々を切るとまわりが明るくなって気持ちまで爽やかになる様子に似ています。そして、罪や ケガレは一つも残らず、きれいに清められるのです。

では、そうやって消えた人間の罪やケガレは、どこに行くのでしょうか。実は、神さまたちの力で、広い海に流され、海の底に沈められ、そして、深い地下の国に吹き飛ばされて、最後は、どこかに 行って跡形も なくなるのです。

みなさんが知らず知らずのうちに重ねてしまう罪やケガレも、きれいに消し去ってくれるよう、たくさんの神さまが清め、祓ってくれているのです。

『親子で読む大祓詞物語』
（大祓詞のことばものがたり）
文 吉村改徳
（神社新報社刊）より

大祓詞（神社本庁版）

高天原に神留り坐す　皇親神漏岐　神漏美の命以ちて　八百万神等を　神集へに集へ賜ひ　神議りに議り賜ひて　我が皇御孫命は　豊葦原水穂国を　安国と平けく知ろし食せと　事依さし奉りき　此く依さし奉りし国中に　荒振る神等をば　神問はしに問はし賜ひ　神掃ひに掃ひ賜ひて　語問ひし磐根　樹根立　草の片葉をも語止めて　天の磐座放ち　天の八重雲を　伊頭の千別きに千別きて　天降し依さし奉りき　此く依さし奉りし四方の国中と　大倭日高見国を安国と定め奉りて　下つ磐根に宮柱太敷き立て　高天原に千木高知りて　皇御孫命の瑞の御殿仕へ奉りて　天の御蔭日の御蔭と隠り坐して　安国と平けく知ろし食さむ国中に成り出でむ天の益人等が　過ち犯しけむ種種の罪事は　天つ罪　国つ罪　許許太久の罪出でむ　此く出でば　天つ宮事以ちて　天つ金木を本打ち切り　末打ち断ちて　千座の置座に置き足らはして　天つ菅麻を本刈り断ち　末刈り切りて八針に取り辟きて　天つ祝詞の太祝詞事を宣れ

此く宣らば　天つ神は天の磐門を押し披きて　天の八重雲を伊頭の千別きに　千別きて聞こし食さむ国つ神は高山の末　短山の末に上り坐して　高山の伊褒理　短山の伊褒理を掻き別けて聞こし食さむ　此く聞こし食してば　罪と言ふ罪は在らじと　科戸の風の天の八重雲を吹き放つ事の如く　朝の御霧　夕の御霧を　朝風夕風の吹き払ふ事の如く　大津辺に居る大船を　舳解き放ち　艫解き放ちて　大海原に押し放つ事の如く　彼方の繁木が本を　焼鎌の敏鎌以ちて　打ち掃ふ事の如く　遺る罪は在らじと　祓へ給ひ清め給ふ事を　高山の末　短山の末より　佐久那太理に落ち多岐つ　速川の瀬に坐す瀬織津比売と言ふ神　大海原に持ち出でなむ　此く持ち出で往なば　荒潮の潮の八百道の八潮道の潮の八百会に坐す速開都比売と言ふ神　持ち加加呑みてむ　此く加加呑みてば　気吹戸に坐す気吹戸主と言ふ神　根国　底国に気吹き放ちてむ　此く気吹き放ちてば　根国　底国に坐す速佐須良比売と言ふ神　持ち佐須良ひ失ひてむ「此く佐須良ひ」失ひてば　罪と言ふ罪は在らじと　祓へ給ひ清め給ふ事を　天つ神　国つ神　八百万神等共に　聞こし食せと白す

大祓詞

高天原に神留り坐す　皇親神漏岐神
漏美の命以ちて　八百萬神等を神
集へに集へ賜ひ　神議りに議り賜ひ
て　我が皇御孫命は　豊葦原水穂
国を　安国と平けく知ろし食せと
事依さし奉りき

現代語訳

高天原(天上)にお鎮まりになられる民族の祖神、カムロギ(男神)カムロミ(女神)のご命令によって、八百万の神々が集まられて、会議に会議を重ね、論議に論議をつくされた結果、天照大御神は、「わが子孫である皇御孫命(天皇)よ、豊葦原の瑞穂の国(日本)を、安らかな国として平和に治めなさい」と仰せになり委託されました。

此く依さし奉りし国中に　荒振る神
等をば　神問はしに問はし賜ひ　神
掃ひに掃ひ賜ひて　語問ひし　磐根
樹根立　草の片葉をも事止めて　天
の磐座放ち　天の八重雲を伊頭の千
別きに千別きて　天降し依さし奉り
き

此く依さし奉りし四方の国中と　大

しかし、託された国内には、不平を言っては反対する神々がいましたので、この神たちの考えや不満を何度も聞き直し、また見直ししながら、国造りに協力して貰えないか繰り返し相談しましたら、荒れていた神々は、やがてその真意を理解し協力するようになりました。すると岩や木や、草の一葉までもがこれに同調し、騒乱の国土はすっかり平穏に治まりました。そこで皇御孫命は、高天原の御座所を立たれ、幾重にも重なる雲を掻き分けながら、地上に降臨されました。

倭日高見国を安国と定め奉りて　下つ磐根に宮柱太敷き立て　高天原に千木高知りて　皇御孫命の瑞の御殿仕へ奉りて　天の御蔭　日の御蔭と隠り坐して　安国と平けく知ろし食さむ国中に　成り出でむ天の益人等が　過ち犯しけむ種々の罪事は　天つ罪　国つ罪　許許太久の罪出でむ

このようにして天照大御神から、委託を受けた皇御孫命は、国の中心の大和の地を都と定められ、盤石な礎石の上に太い柱を建て、屋根は天まで届くかのような高い千木を取り付け、荘厳な御殿をお造りになりました。

その御殿で皇御孫命は、皇祖の神々のお陰を戴きながら、この国を平安な国として治め、さらに努力しますが、国内に生れ育つ人間というのは悲しいもので、故意の罪や無意識の過ちを犯したりして、数多の罪や穢れを溜めてしまうのです。

此く出でば　天つ宮事以ちて　天つ金木を本打ち切り　末打ち断ちて千座の置座に置き足らはして　天つ菅麻を本刈り断ち　末刈り切りて八針に取りさきて　天つ祝詞の太祝詞事を宣れ

此く宣らば　天つ神は天の磐門を押し披きて　天の八重雲を伊頭の千別

皇御孫命は、そのような罪穢れが生じた際に、それを消し去る方法を教えました。それは、高天原の神々の儀式に倣って、細い木の本と末を切り揃え、これを罪の贖い物として、多くの台の上に沢山積み、また菅や麻の本と末も切り、真中の良いところを細かく裂き、それを祓いの道具に用いて神事を行い、この神聖な祓いの祝詞を唱えなさい。

◇

このように唱えるならば、天上の神は高天原の門を開かれて、幾重にも重なっ

きに千別きて　聞こし食さむ　国つ
神は高山の末　短山の末に上り坐し
て　高山の伊褒理　短山の伊褒理を
掻き別けて聞こし食さむ
此く聞こし食してば　罪と云ふ罪は
在らじと　科戸の風の天の八重雲を
吹き放つ事の如く　朝の御霧　夕の
御霧を　朝風　夕風の吹き拂ふ事の

た雲を押分けてお聞きくださるでしょう。また地上の神も、人間の様子がよく見える高い山や低い山に登られて、靄や雲や霧を払いのけ、人間の願いをお聞きになるでしょう。

◇

このように、天上の神や地上の神々が、お聞き届け下さいましたならば、四方世界の罪穢れは一切なくなってしまうでしょう。それはあたかも、風が八重の雲を吹き払うように、また朝夕に立ちこめる霧を風が吹き払うように、あるいは

如く　大津辺に居る大船を　舳解き
放ち　艫解き放ちて　大海原に押し
放つ事の如く　彼方の繁木が本を
焼鎌の敏鎌以ちて　打ち掃ふ事の如
く遺る罪は在らじと
祓へ給ひ清め給ふ事を　高山の末
短山の末より　佐久那太理に落ち多
岐つ　速川の瀬に坐す瀬織津比売と

港に繋ぎ止めて不自由な様子の、船の綱をほどき、自由に広い海を航海させるように、また鬱蒼と繁っている木々を、鋭い鎌で切り払えば、回りが明るくなり、爽やかな気持ちになるように、漏れ残る罪穢れは一つもないように祓われて清らかになるでしょう。

このように祓い清められた罪穢れは、高い山低い山の上から、谷間を勢いよく流れ落ちる早川の瀬にいる瀬織津姫という神様が大海原に流し去ってくれるでしょう。

云ふ神　大海原に持出でなむ
此く持ち出で往なば　荒潮の潮の
八百道の八潮道の潮の八百会に坐す
速開都比売と云ふ神　持ち加加呑み
てむ
此く加加呑みてば　気吹戸に坐す
気吹戸主と云ふ神　根国　底国に気
吹き放ちてむ

◇

大海原に流されたならば、押し寄せる荒潮がぶつかり合って、渦を巻いている所にいる速開都比売という神様が、大きな口を開けて罪穢れをがぶがぶ飲み込み、海底深く沈めてくれるでしょう。

◇

海底深く飲み込まれた罪穢れは、次の、息を吹き出す所にいる気吹戸主という神様によって、「根の国、底の国」という地下の国に遠く吹き放ってしまわれるでしょう。

此く気吹き放ちてば　根国　底国に
坐す速佐須良比売と云ふ神　持ち佐
須良ひ失ひてむ
此く佐須良ひ失ひてば　罪と云ふ罪
は在らじと　祓へ給ひ清め給ふ事を
天つ神　国つ神　八百萬神等共に
聞こし食せと白す

吹き放ってくださると、根の国底の国にいる速佐須良比売という神様が、何処とも知れず運び去って、跡形もなく消し去ってくれるでしょう。

◇

このように、あらゆる罪穢れを消し去って戴きますことを、天上の神様、地上の神様、そして八百万の神様ともどもに、どうかお聞き届け下さり、私たち人間の罪穢れを祓い清めて戴きますよう、謹んでお祈りし申し上げます。